

全関西婦人連合会における錦織久良の婦人運動

戦時体制下の信仰と女性の権利

岩田三枝子

序

背景

錦織久良（にしごり・くら 1889-1949）が会員数 300 万人以上¹とされる西日本最大の女性連合団体である全関西婦人連合会（以下、「全関西」）で活動した時期は、40 代になった頃である。それは、20 代半ばでキリスト者となり、日本基督教婦人矯風会（以下、「矯風会」）機関誌『婦人新報』や『基督教世界』に女性の権利に関わる問題やキリスト教文芸を発表しながら結婚・育児期間を経た後のことであった。錦織は政治法律部委員長として、その後 10 年以上にわたり、全関西の中心的役割を担うようになる。錦織の全関西での活動時期は、1930 年代以降の日本国内での軍国主義が色濃くなる時代の中であった。

先行研究

錦織に関する先行研究として、拙論「日本基督教婦人矯風会機関誌『婦人新報』にみる錦織久良の廃娼論」²「『基督教世界』における錦織久良—宗教文芸家から銃後の婦人へ」³においてそれぞれに、錦織の信仰と女性運動の動機を解明し、また宗教文芸家としての錦織が戦時体制の中で次第に銃後の婦人としての自覚的な発言をするようになった過程を明らかにした。それ以外には、錦織に単独で焦点を当てた先行研究は管見の限り見当たらない。関連する女性運動史の中で簡単な人物紹介がな

-
- 1 『婦人』第 5 巻 2 号、1928 年 2 月、49、59 頁；東京綜合婦人会編『昭和 12 年版』東京綜合婦人会、1937 年、121 頁
 - 2 岩田三枝子「日本基督教婦人矯風会機関誌『婦人新報』にみる錦織久良の廃娼論」（『キリストと世界』33 号、東京基督教大学、2023 年 3 月、37-69 頁）
 - 3 岩田三枝子「『基督教世界』における錦織久良—宗教文芸家から銃後の婦人へ」（『キリストと世界』34 号、東京基督教大学、2024 年 3 月、1-22 頁）

されているのみである⁴。

全関西についての主な先行研究には、石月静恵・大阪女性史研究会編『女性ネットワークの誕生—全関西婦人連合会の成立と活動』（ドメス社、2020年）、『「婦人」解説・総目次・索引』（不二出版、1996年）、藤目ゆき「全関西婦人連合会の構造と性質」（『史林』71(5)、史学研究会、1988年、747-776頁）があり、一次資料を収めたものとして、1924年から1937年までの『婦人』全巻を収録した復刻版（不二出版、1996年）、関連資料を所収した『日本女性運動資料集成』全11巻（鈴木裕子編、不二出版、1993-98年）があるが、全関西に関わる個人に焦点を当てた研究ではない。

本研究の意義と目的

現代においては、女性運動史の中でも、キリスト教界においても、錦織は知られている人物とは言い難いものの、1928年の大阪毎日新聞では矯風会の林歌子と共に「関西婦人運動家のオール・スター・キャスト」⁵の一員として名前が記載されている。そんな彼女が、キリスト教界内だけではなく、キリスト教の枠組みを超えて一般の女性運動の中でキリスト教信仰を保持しつつ、30年以上にわたり中心的な役割を果たしたその活動は注目に値する。活動の動機や、女性問題への眼差し、またキリスト教信仰との関わりは、一女性の発言と行動でありながらもそれが時代を反映するものとして、昭和初期から戦間期のキリスト教および女性運動のあり方を

4 例えば、鈴木裕子編『日本女性運動資料集成 別巻 索引』（不二出版、1998年、168-169頁）に半ページほどに渡って錦織の生涯概略が掲載されている。また、賀川豊彦の妻・ハルの友人であったことや、また賀川ハルが中心となって活動していた覚醒婦人協会（1921-23年頃）でも活動をしていたことから、拙著『評伝 賀川ハル—賀川豊彦とともに、人々とともに』（不二出版、2018年）や、永渕朋枝「藤村発行『処女地』に執筆した織田やす一覚醒婦人協会との関わり」（『神女大國文』27、神戸女子大学国文学会、2016年3月、38-57頁）の中で、わずかに触れられている。また、賀川ハルとの関係から、『賀川ハル史料集』第2巻（三原容子編、緑蔭書房、2009年）及び前掲拙著の中には、錦織から賀川ハル宛の私信2通（1927年5月26日、1928年5月16日）が所収されている。覚醒婦人協会は、1921年、賀川ハル、長谷川初音、織田やすが中心発起人となり、賀川ハルの神戸の自宅を拠点として、女工の労働環境の整備など、女性の権利獲得のために講演活動、機関誌出版、ストの指導などを行った。特に賀川ハルは機関誌の編集作業の中心を担っていたと思われる。活動半ばであったが、1923年の関東大震災を機に賀川一家が東京に転居した後は活動の形跡はなく、機関誌の発行も確認できないことから、自然消滅したと考えられる。

5 『大阪毎日市内版』1928年5月17日、9頁

考察するうえでも貴重であると考ええる。

本論文では、錦織に関する先の二編の拙論に続く完結編として、錦織が全関西機関誌『婦人』に発表した執筆30件及び機関誌『婦人』内の諸記事、新聞記事等を資料として、戦時体制下における錦織のキリスト教信仰と女性の権利獲得を目指した意義と限界を検討する。

1. 全関西婦人連合会の概略と背景

全関西婦人連合会概略

全関西⁶は大正デモクラシーの只中である1919年に、大阪朝日新聞の呼びかけで発足した、矯風会や地方の女性団体などの連合団体である。大阪に本部をおき、1927年からは大阪朝日新聞記者であった恩田和子⁷が理事長を務め、1941年までは毎年大阪で大会を開催した⁸。全関西は、参政権をはじめとして、政治、教育、家庭における女性の権利や生活環境について、さらには国を超えた女性同士の交流についてなど、身近な課題から国際的な課題まで、多岐にわたる分野に取り組んだ。大会の出席者は西日本全域におよび、例えば錦織が初めて司会者として登場する第11回大会（1930年）では、大阪、兵庫、京都、滋賀、和歌山、奈良、福井、富山、東海、岡山、島根、鳥取、山口、四国、福岡、長崎のそれぞれの代表団の写真が掲載され、大会参加者は「三百四十余」名とされている⁹。

全関西では、1924年から機関誌『婦人』を発刊する。1937年に『婦人』は終刊となり、代わって『婦人朝日』¹⁰が発刊されたが、『婦人朝日』の内容はグラビアやファッション等を中心としたもので、それまでの『婦人』に多数掲載されていた女

6 全関西の詳細については、本文にも挙げた次の文献を参照。石月静恵・大阪女性史研究会編『女性ネットワークの誕生—全関西婦人連合会の成立と活動』ドメス社、2020年；『婦人』解説・総目次・索引』不二出版、1996年；藤目ゆき「全関西婦人連合会の構造と性質」（『史林』71(5)、史学研究会（京都大学文学部内）、1988年、747-776頁）。

7 恩田和子（1893-1973年）。日本女子大学校を卒業後、『読売新聞』の記者を経て、大阪朝日新聞の記者となる。全関西の大会が大阪朝日新聞から独立して全関西主催となった1927年から、全関西の理事長を務める（石月・大阪女性史研究会編、前掲書、19-20頁）。

8 1928年は、「御大典が行はせられるについて、各地の婦人会に奉祝に関する種々の事業が」あるため、中止になった。（『婦人』第5巻10号、1928年10月、59頁）

9 『婦人』第6巻11号、1930年11月、10-24頁

10 その『婦人朝日』も、1943年5月で終刊となった。

性の権利等の記事はほぼ見られず、女性に関する諸問題への提言を行ってきた『婦人』は実質上、1937年でその役割を終えたと言える¹¹。

全関西婦人連合会の背景と特徴

全関西が発足した大正時代、日本国内では女性の権利を求める運動が高まっており、多数の婦人団体が誕生していた。例えば、平塚らいてうや市川房枝を中心に女性の政治的権利獲得等に取り組んだ新婦人協会は、1919年の全関西婦人連合会第一回大会¹²において創立宣言を行い、その後活動を開始している。また1921年には、キリスト者である賀川ハル、長谷川初音、織田やす等が中心となって女工の権利に取り組んだ覚醒婦人協会なども誕生し、神戸・大阪を中心に活動を展開している¹³。全関西が誕生したもの、このような日本国内における女性運動の機運の高まりの中であった。

ただし、前述のさまざまな同時代の女性団体と全関西には、大きく異なる点が二点ある。一点目は、前述の女性団体がそれぞれ特有の目的に沿った活動を展開したのに対して、全関西は諸団体の連合として設立されたという点である。

二点目は、前述の諸女性団体が個人の関心から、いわば当事者、特に女性によって主体的に設立された団体であったのに対し、全関西は、大阪朝日新聞主導で設立された団体であり、男性かつ組織によって設立されたものである。これは、1911年に平塚らいてうが中心となった雑誌『青鞥』にて家と家との結婚への反対や堕胎の権利を求めたことで「新しい女」と呼ばれた時期からすでに約10年の月日が経過し、当時の社会の中で女性の権利に対する一定の理解が生まれてきたこと、さらに経済活動における女性の役割や活動の重要性が認識されるようになったことを示すものだろう。それゆえ、全関西のような団体は、男性にとっては、女性の権利獲得の後ろ盾となっていることを示すことでジャーナリズム世界の先端を行く新聞社として自社の評判を高めることになり、また女性にとっては、女性だけでは広報的

11 例えば、創刊号では、「女性と社会（社会時評）」の記事が一編あるものの、その他は「グラフィック 雪と少女」「今月のレコード」「全国女学校のお自慢コンクール」「シンプソン夫人好みのスタイル」などファッションや趣味の記事が目次に並んでいる（『婦人朝日』1937年2月号（日本近代文学館編『復刻 日本の雑誌』講談社、1982年）。

12 大阪朝日新聞では、「婦人会関西連合大会」と紹介されている。（『大阪朝日新聞』1919年11月25日朝刊、11頁）

13 前掲拙書参照

にも経済的にも難しい関西全域への広報と経済的な後ろ盾を得ることができるという点で、両者にとっての益があったと思われる。

2. 全関西婦人連合会での錦織の活動

政治法律部委員長として

錦織の大会での発言の最初の記録は、1923 年に見られる。関東大震災直後の 10 月 16 日開催の大会で、「子供のみならず母親も子供と一緒に預つてやらねばならぬ」¹⁴ との発言が記録されているが、この頃は錦織が全関西の中で特定の役割を担っていたという記録はない。1927 年の第 9 回大会ではまだ諸部が成立している様子はなく、1928 年の大会は御大典事業のために中止されており、1929 年の第 10 回大会では「社会部」において錦織は「婦人として緊急に最も力を注ぐべき社会事業」¹⁵ として女工の深夜業廃止などの提案を行っている。1930 年の第 11 回大会では錦織が司会者¹⁶ 及び政治法律部委員会の委員長¹⁷ となっている。どの時点で政治法律部が成立したのかは定かでないが、錦織が初代かつ唯一の政治法律部委員長である可能性もある。その後、1941 年の第 22 回大会に至るまで、錦織は司会者及び政治法律部の委員長としての役を担った。

全関西の役員たちの活動が記録された本部日誌には、当時の錦織の全関西政治法律部委員長としての多忙ぶりが記されており、例えば、錦織が 42 歳の時の 1932 年 6 月の日誌は次のようなものである。

- 6 月 5 日「錦織久良子氏宇治イースト研究所に開かれた翠会で講演」
- 6 月 11 日「錦織久良子氏濱寺小学校で開かれた濱寺婦人会にて講演」
- 6 月 15 日「錦織久良子氏明石市の婦人矯風会に出張講演」
- 6 月 16 日「大阪婦人矯風会で「母の座談会」を開催、本会より恩田和子、錦織久良子、進藤徳子、大賀かん子、(中略) 出席」
- 6 月 19 日「錦織久良子氏鶴町教会一般講演会に出張講演」
- 6 月 20 日「満州国協和会使節一行が夜八時四十五分大阪駅通過、恩田、錦織 (中略)

14 『大阪朝日新聞』1923 年 10 月 16 日朝刊、7 頁

15 『婦人』第 6 巻 4 号、1929 年 4 月、9、11 頁

16 『婦人』第 7 巻 11 号、1930 年 11 月、10 頁

17 同上、12 頁

出迎に行き歓迎の辞をのべる」

6月21日「錦織氏、須磨常磐母の会に出張講演」

6月25日「錦織氏開花幼稚園母の会に出張講演」

6月30日「夜は恩田、錦織両氏の案内で使節たちは村山朝日新聞社社長邸に行き純日本式の生活に浸る」¹⁸

全関西の理事長である恩田とともに代表者の一人として各行事に名を連ねているこれらの記録からは、錦織が政治法律部長として、全関西の中核的な働きを担っていた一人であったことがわかる。

執筆者として

錦織は全関西の機関誌『婦人』誌上でも、自ら啓蒙の取り組みを行った。1931年に『婦人』に「尻馬ははじめ」¹⁹を寄稿して以降、錦織の寄稿件数は30件に上る。その内1934年7月から1935年7月までの期間は「女性展望台より」として13回の連載を行い、錦織の解説による婦人運動の動向や、全関西が取り組んでいる民法改正の解説などを行っており、これについては後述する。

戦後の活動

全関西の大会は1937年第18回以降は、「非常時大会」²⁰と呼ばれ、1941年第22回大会まで開催記録があるが、それ以降の大会開催の記録は見られない²¹。戦後に錦織は女性運動の活動を再開したようである。1946年には「日本主婦の会」を大阪朝日会館で発足し²²、社会党大阪支部婦人部長や矯風会大阪支部長、また大阪家庭裁判所の調停委員を務め²³、1948年には平和母性協会を創設し会長に就任した²⁴といった記録もあるが、錦織の戦後の活動の詳細については不明点が多く、今後の研

18 『婦人』第9巻7号、1932年7月、19頁より抜粋。

19 錦織久良子「尻馬ははじめ」（『婦人』第8巻1号、1931年1月、6頁）

20 「銃後女性の奉公“実践へ” 真摯の誓日！全関西婦人連合会の『非常時大会』開く」（『大阪朝日新聞』1937年10月26日夕刊、2頁）

21 石月は、「解散宣言をしておらず、ゆえに自然消滅したわけではない」との見解である。

22 大阪歴史科学協議会編『戦後大阪史年表』大阪歴史科学協議会、1975年、2頁；石月・大阪女性史研究会編、前掲書、52頁

23 鈴木編、前掲書、169頁

24 石丸尚子「故錦織久良子夫人をいたむ」（『婦人新報』1949年4月、589号、7頁）

究課題である。1949年2月6日、59歳で亡くなった²⁵。

3. 全関西婦人連合会で錦織が目指したもの

民法改正と発言の機会

錦織が全関西での活動に求めたものは何であったのか。藤目は、全関西の会員の中心は官製、半官製団体に組織された女性たち²⁶であり、全関西には政府側とデモクラシー状況の緊張関係²⁷があったとしているが、それこそ錦織が求めていたものではなかったか。大正デモクラシーの中で、一般民衆の存在感が高まり、女性運動も拡大し、それ以前の時代に比べると政治・官に対しての女性たちの自由な発言が可能となった時代である。家庭における女性の権利獲得のために民法改正が必要だと感じていた錦織にとって、その手段と可能性が全関西にあると期待していたのではないか。官製だからこそ、民法改正の機会にも近づくことができる。そしてデモクラシーの時代だからこそ、一女性である錦織にも発言の機会があった。藤目が、全関西は知識人運動にとどまらない広範囲の女性を含んでおり、ゆえに地位においても地域においても普通の国民運動であった²⁸と指摘しているが、そのような「普通の国民」の一人であった錦織は、全関西に民法改正の可能性と発言の機会を求めたのだろう。

本章では、1929年以降の全関西の大会での錦織の発言および『婦人』の錦織による執筆を中心に検討することで、錦織が全関西を通して達成しようとしていた目的を明らかにしたい。錦織の全関西における主張は大きく二点に集約することができる。一点目は女性の権利に関する主張であり、これは主に活動期間前半の民法改正への取り組みに代表される。二点目は銃後の婦人としての義務の推奨であり、これは主に活動期間の中期以降から登場する塵芥清掃問題への取り組みに代表される。

女性の権利

一点目の、女性の権利については、『婦人』への執筆の中や大会での発言におい

25 石丸尚子「故錦織久良子夫人をいたむ」（『婦人新報』1949年4月、589号、7頁）。記事内には「六十一才」とあるが、これは数え年での数え方であろう。

26 藤目、前掲論文、93頁

27 藤目、前掲論文、100頁

28 同上

て、錦織による民法改正の解説というかたちで、その必要性を繰り返して訴えている。例えば、『婦人』第8巻10号では、自らが取り組む民法改正の内容を次のようにまとめている。下記に、錦織による引用を「」で示したのち、筆者の解説を付す（下線は筆者による）。

「婦人のために改正すべき法律」²⁹

「△妻の無能力的取扱に対する法律の改善」

家庭において、妻の権限がないことを改善する。例えば、民法第14条の妻は「夫ノ許可ヲ受クル事ヲ要ス」の、妻は財産に関する権利を持たないこととする条項を改正する。

「△妻の財産権の確保」

民法第801条「夫ハ妻ノ財産ヲ管理ス」といった部分で、財産の管理については「夫婦の相談に任せ」るべきであるとする。

「一、母の親権を認めること」

民法第816条「親権ヲ行フ母ガ未成年ノ子ニ代リテ左ニ揚ゲタル行為ヲ為シ又ハ子ノ之ヲナスコトニ同意スルニハ親族会ノ同意ヲ要ス」について、「立派な見識のある母親があつて、夫の死亡によつて子供の親権者となつても、たゞ女なるが故に母なるが故に七面倒くさい手続を幾つも踏んで親族会の同意を一々得なければならぬとは不合理な事」であるとする³⁰。

「一、私生児の名簿を撤廃する事」³¹

戸籍上で、私生児であることがわからないようにする。

「一、嫡出子は女兒と雖も庶子に優先する権利を与へる事」³²

本妻の子供が女子であつたとしても、男子の庶子よりも女子の嫡子の相続順位が優先されることとする。

29 錦織久良子「婦人のために改正すべき法律」（『婦人』第8巻10号、1931年10月、56-59頁）

30 同上、57頁

31 同上、58頁

32 同上

「一、庶子の入籍には父の妻の同意を要する事」³³

夫は、妻の子供以外の子供を妻の同意なく戸籍に入れることはできないようにする。

「一、胎児の権利擁護」³⁴

民法 968 条「胎児ハ家督相続ニ就テハ既ニ生レタルモノト看做ス」について、嫡子が胎児であっても相続権は庶子に優先することとする。

「遺産相続の場合に於ける妻の利益」³⁵

夫が亡くなった場合、「直系」の子供だけではなく、配偶者である妻も財産の相続を受ける権利があることとする。

これらは、妻が家庭において夫と平等な権利を持つことを求める要求である。特に、本妻とその子供の権利を優先する一方で、本妻以外の女性とその子供の権利を制限しようとする要求でもある。錦織は、夫が妻との婚姻関係にある場合に、妻以外の女性や子供が夫の家族としての権利、特に財産権を持つことについては厳しく制限するように求めている。同様の訴えを『婦人』誌上において、「婦人に関する民法改正案に就て 穂積重遠博士を訪ふ」³⁶「民法改正 私生子問題 A と B との対話」³⁷「第六十四議会に提出された婦人と子供に関する法律案」³⁸「銷夏漫筆 声のみの民法改正一家事審判所の要望」³⁹「女と子供に関する議会持ち腐れ案再吟味」⁴⁰「女性展望台より一親子心中と母子扶助法案」⁴¹等で繰り返している。また大会でも、政治法律部

33 錦織久良子「婦人のために改正すべき法律」（『婦人』第8巻10号、1931年10月、58頁）

34 同上

35 同上

36 錦織久良子「婦人に関する民法改正案に就て 穂積重遠博士を訪ふ」（『婦人』第9巻2号、1932年2月、16-18頁）

37 錦織久良子「民法改正 私生子問題 A と B との対話」（『婦人』第9巻7号、1932年7月、12-13頁）

38 錦織久良子「第六十四議会に提出された婦人と子供に関する法律案」（『婦人』第10巻4号、1933年4月、10-11頁）

39 錦織久良子「銷夏漫筆 声のみの民法改正一家事審判所の要望」（『婦人』第10巻9号、1933年9月、11-13頁）

40 錦織久良子「女と子供に関する議会持ち腐れ案再吟味」（『婦人』第11巻2号、1934年2月、39-40頁）

41 錦織久良子「女性展望台より一親子心中と母子扶助法案」（『婦人』第11巻8号、1934年8月、41-43頁）

委員長である錦織による民法改正案についての同様の発言が記録されていることから⁴²、錦織が自らの使命としてこの民法改正に取り組んでいたことは明らかである。

ただし、錦織の民法改正の本来の意図は、妻の権利を擁護し、妻以外の女性やその子供の権利を制限しようとするだけのものではない。そこには当時の男性と女性の不平等な貞操観への厳しい指摘がある。

日本の私生子の父親は、その子及び子の母に対してあまりにも無責任過ぎるやうに思はれる。(中略) 私生子の父親にも徹頭徹尾責任を持たすといふことは当然なことで、我国のやうに私生子の母のみがあまりにも多くの負担と責務とを背負はされ、私生子の父は無責任を当然となすが如きは、女子にのみ貞操義務を強ひることの厳にして男子の貞操に対する寛なる旧来の伝統的悪習がこゝにも現はれつゝあることは、女性として黙過すべからざる事柄である。⁴³

とかく現代の婦人の地位は、まだ――男子の従属物以外に出でず、民法においては妻は無能力者であり、母としては父と同様の親権が与へられず、貞操に関しては妻のみが貞操義務を強ひられ、良人は不品行天下御免であり、かうした男子の従属物取扱より解放されざるうちは、いつまでもこの種の問題は尽きないであらう。女性の向上のために惜しむものである。⁴⁴

また、男性と女性の貞操概念の平等を求める錦織の訴えは、かつて錦織が矯風会において取り組んだような公娼制・私娼制の廃止の訴えにも繋がっている。

今日の廃娼令は、たゞ単なる外国に対する面目のみではなく、すでに時代は推移して廃娼案の国会を通過したる (中略)。有害無益なる公娼を廃止して、極力絶娼に全力を傾倒し、私娼取締法を厳にして、私娼撲滅に邁進するこそ時代の要求であり、人道上斯くあるべき当然の帰結でありますまいか。⁴⁵

42 例えば、第12回大会(1931年)での政治法律部委員長としての錦織の提案など。(『婦人』第8巻10号、1931年10月、7-9頁)

43 錦織久良子「女性展望台より 私生子認知の訴訟」(『婦人』第11巻11号、1934年11月、22頁)

44 錦織久良子「女性展望台より 新良妻賢母主義」(『婦人』第12巻1号、1935年1月、40頁)

45 錦織久良子「女性展望台より 目睫の間に迫る廃娼令と廃娼問題」(『婦人』第11巻10号、

また、このような課題を解決するためには、女性が家庭だけに目を向けているのではなく、女性自身もまた自覚的に政治的問題に関心を持つべきであると訴える。

参政権運動、平和運動等については目下のところかんばしい報告が出来ないからである。一体今日の日本婦人をこの展望台から眺望すると、一部は別として全体的に婦人自らの地位を向上すべき自覚に到達してゐないことである。(中略) 自分の着てゐる綿紗の羽織に織物消費税のかゝつてゐることも、税金をなめてゐるやうな砂糖消費税のかゝつてゐることも知らず、瓦斯、水道、衛生、道路、さては子供の学校のことで、これ皆市町村の政治と密接なる関係あることを説いて公民権獲得に言及しても、公民権となるとさてそれは家庭婦人の関与すべきことにあらずと思惟するのである。⁴⁶

以上のように、錦織は家庭における妻と夫の権利の平等、また貞操観の平等を掲げ⁴⁷、民法改正の実現はもとより、女性自身の意識の改革も必要であると訴えた。

銃後の婦人の義務

錦織の主張の二点目は、戦時体制下における銃後の婦人の義務の推奨である。

錦織の取り組みを軸に、全関西大会の変化の様子を年代順に確認したい。1930年までは大日本連合婦人会との協力関係に対して、「天下り式の、恰も婦人の奴隷時代と再現するやうな組織に反対」であり、「婦人の自主的、自治的立場を危くするもの」であり、「いはゆる文部省が唱導する所の家庭教育、家庭改善に止」まるものであるゆえ、「全関西婦人連合会（中略）は大日本婦人連合会（ママ）加盟せざることに決定す」る、といった官への抵抗の姿勢を見せている⁴⁸。しかし満州事

1934年10月、21-22頁）

46 錦織久良子「女性展望台より 外国に紹介される日本の婦人運動、二つの母性愛」（『婦人』第12巻2号、1935年2月、10-11頁）

47 錦織自身は20代の頃、特に父親の女性関係に起因する家庭内の不和への悩みからキリスト教信仰に導かれた経験を持つが、その錦織自身の原体験に動機付けられた延長線上にある取り組みと言えるだろう。前掲拙論「日本基督教婦人矯風会機関誌『婦人新報』にみる錦織久良の廢娼論」37-69頁等参照。

48 『婦人』第8巻3号、1931年3月、8頁

変の起こった1931年を境に、全関西の戦時体制への賛同の姿勢が明確になる⁴⁹。この年の第12回大会では、日本の出兵について「出兵は決して領土的野心なく、単に権益擁護と在留邦人保護のため」⁵⁰であり、「満州事変は戦争でなく、紛争に過ぎない、この紛争が不戦条約に抵触するものではない」⁵¹と国際部から説明される。そうとはいえ、この第12回大会の初めには「会歌合唱」⁵²が実施されるが、さらに後の大会には行われたような宮城遥拝はまだ執り行われておらず、政治法律部委員長の錦織から「法令に規定されたる男女差別待遇の撤廃に関する件と女子及び子供保護に関する法律について」⁵³提案がなされるなど、全関西が女性を取り巻く課題を扱うことのできた比較的穏やかな時代であったとも言える。翌1932年の大会では、この会歌に代わり国歌が歌われるようになってくる⁵⁴。

1932年はさらに、戦時体制の色合いが強くなる。1932年2月には婦選デーが実施され、全関西でも女性の「公民権、結社権、参政権に関する請願書五十万枚を全国に発送」⁵⁵するなど多忙な様子が『婦人』で報告される一方で、錦織が司会を務めた10月の全関西第13回大会では国歌斉唱が行われ、「建設事業の一基を、婦人の手によつて樹立されんとする諸姉の努力は、重大かつ有意義」⁵⁶と語られる。また、それまでの全関西では女性が中心となってプログラムが執り行われていたことに対し、この年の大会では、「後援者側を代表して大阪朝日新聞社編集局長高原操氏」や「ハルビン事務局長近藤義晴氏」などの男性の登壇者の姿も目立ち、代読とはいえ総理大臣齋藤實からの言葉も語られる。また、満州へ日本側から代表の女性たちを派遣する提案に対して、錦織も熱心に賛成した様子が記録されている⁵⁷。日満婦人連合会後の満州婦人使節交歓会では、錦織は女性の代表の一人として、満州から来日した女性たち数名を引率して、歓待のために朝日新聞社長宅の訪問を行っている

49 石月は1932年から41年までを非常時体制として区分している。(石月・大阪女性史研究会編、前掲書、45-49頁)

50 『婦人』第8巻11号、1931年11月、6頁

51 同上、12頁

52 同上、3頁

53 同上、7頁

54 また1931年には、全関西主催の第3回全日本婦人経済大会も行われており、ここでも錦織は司会を務めている。(同上、14頁)

55 『婦人』第9巻2号、1932年2月、11頁

56 『婦人』第9巻11号、1932年11月、5頁

57 同上、7頁

る⁵⁸。

1933年の2月には、錦織の司会によって「都市清掃研究座談会」にて大阪の塵芥問題が扱われる⁵⁹。錦織は、清掃運動は「婦人の義務」⁶⁰と述べるが、大阪市の「保険部長安達将総」「清掃課森本頼平」「清掃係主任兼清掃主事山崎豊」等々、男性発言者の姿が目立ち、家庭の領域を取り扱う座談会であるが、そこには、男性が語り、女性が聞く、という構図が見られる。

1933年11月の第14回全関西大会には錦織の司会のもと、「朝香宮妃殿下薨去につき全員一同起立し一分間黙祷」⁶¹を行い、天皇家との結びつきを強める様子が見られ、「非常時日本の女性、東洋平和維持の大使命を負うて奮闘せる日本帝国の女性としての尊き責務を遂行」「足並揃へて勇ましく進まん」⁶²といった軍国主義の精神を駆り立てるような言葉が並ぶ。議題には「非常時経済について婦人の立場を如何にすべきか」「日満夫人が協力して実現すべき文化的運動と事業について」といった時局を感じさせる内容に並んで、「家事審判所設置の運動について」や「婦人と子どもに関する民法改正を促進せしむる方法について」といった、これまでのような子供や女性の権利獲得のための議題もまだみられる点から、女性の権利についての扱いが大会において皆無となったということではまだない⁶³。

1934年の第15回全関西については、司会者の記録はないが、錦織は関西風水害について「婦人の立場より災禍後の新生活を如何に建設すべきか」の提案を出している⁶⁴。

1935年7月には、「如何にして清掃運動を普及徹底せしむべきか」の議題で全関西が近畿婦人清掃運動協議会を開催し、「わが国における台所塵芥整理問題を婦人の手で解決すべく協力一致努力の意気込み」⁶⁵の言葉からは、家庭内での女性の役割を強調する方向性が見られ、錦織もこれに参加している。

1935年の第16回全関西では、錦織は引き続き大会の司会者かつ政治法律部の委員長である。錦織が担当する「政治法律方面」の議題には、「如何にして婦人に政

58 『婦人』第9巻12号、1932年12月、8頁

59 『婦人』第10巻3号、1933年3月、14-18頁

60 同上、14頁

61 『婦人』第10巻11号、1933年11月、3頁

62 同上、2頁

63 同上、3頁

64 『婦人』第11巻11号、1934年11月、12頁；『大阪朝日新聞』1934年11月7日朝刊、11頁

65 『婦人』第12巻7号、1935年7月、36-37頁

治教育を徹底せしむべきか」「母性保護法の制定について」「家事調停法について」と記録され⁶⁶、女性に関する項目も見られるものの、「衣食住の合理化」「日用品の単純化」「国産愛用」⁶⁷といった家庭内での女性の役割を強調する言葉が並ぶ。そのような中でも、ここ3年は日満、非常時、関西風水害のことで忙しかったが、今年は、「ほんたうに落ついて婦人本来の根本問題を協議したい」⁶⁸として、錦織は民法改正への意欲を見せている。かねてから女性が政治に関心を持つことの必要性を訴えていた錦織であったが、この大会においても、選挙肅正について、「婦人に政治教育を徹底せしむべき」⁶⁹と述べ、さらに母性保護法、家事調停法⁷⁰について発言している。

1936年には、全関西が共同主催となった選挙肅正婦人大会⁷¹が執り行われ、錦織も閉会の挨拶を述べている⁷²。「朝日新聞副社長下村宏」「大阪毎日新聞主筆高石眞五郎」が講演者であり、男性が語り手、女性が聴き手という構図がここにもある⁷³。この大会では、「伊勢神宮ならびに宮城を遥拝、国旗に敬礼、君が代を斉唱」「憲法発布勅語を奉読」など、軍国主義の色合いがより濃厚になる⁷⁴。ここでは、「内助の功」「婦人の立場より選挙の宿弊を矯正する」⁷⁵との呼びかけを多用しながら、選挙権のない女性であっても、肅正選挙のためにピラを撒く行動や、選挙にいきましようと男性に呼びかけることによって政治に参加し、よき国民として、また男子の協力者としての義務を果たせるのだ、という、男性を支えることを通して国を支えるとの論理が示される。

1936年は第17回全関西が開催され、錦織は例年と同じく司会を務めている⁷⁶。大会では、「母子扶助法を制定」「民法改正促進」「人事調停法制定」⁷⁷が議題としてま

66 『婦人』第12巻11号、1935年11月、2頁

67 同上

68 同上、4頁

69 同上、7頁

70 同上、8頁

71 『大阪朝日新聞』1936年2月16日朝刊、14頁

72 『婦人』第13巻3号、1936年3月、11頁

73 同上

74 同上、10-11頁

75 同上

76 『婦人』第13巻11号、1936年11月、23頁

77 同上、22頁

だ挙げられているが、大会全体はかつての様相からは大きく変化している。大阪朝日新聞「編集局長原田譲二」の挨拶では、「主婦たる皆様に家庭の再検討を願はねばなりません（中略）家庭をかへりみて充実しておいてから男子同様の様々な権利なども要求すべき」⁷⁸と語られ、それに対する女性側からの応答は記録されていない。一方で錦織は政治法律部委員長として、「婦人の力を自治制の上に反映させる」⁷⁹と述べ、さらに街の美化の目的は、美化そのものではないこと、女性の力を政治に反映させるべきであること、民法改正も20年になるのだからそろそろ建議案を出すべきこと等を訴えている。大会を覆う雰囲気は戦時体制の中にあるが、錦織自身は母子扶助法の建議案を主張し、民法改正についてなお取り組む姿勢を見せている。同年、『婦人』誌上でも、錦織は民法改正に結果が見られないことに対して、次のように苦言を呈している。

女性の問題は毎年議会に提出されてゐるのに、いつも有耶無耶に果敢ない終りをつけてしまつてゐます。今度も女性に関する問題としては母子扶法案、家事調停法案などが提出されることと思ひますが、これについても出来るだけの努力を払つていただきたいと思ひます。（中略）女性に関する法案を早くパスさせてほしいものです。一日も早く民法が改正されて家庭裁判所の出来ることを待ち望んでゐます。⁸⁰

1937年の第18回全関西大会は、非常時大会と呼ばれ⁸¹、この大会以降は、錦織の司会により、皇居、伊勢神宮遙拝、君が代斉唱が大会冒頭に行われるようになる。また議題は、支那事変の一線にいる各司令官宛に「感謝と激励の打電を行ふ」こと、「体位の向上」「銃後の奉仕」「堅忍持久の精神の涵養」「日本精神の発揚」「非常時経済政策への婦人の協力」⁸²といった非常時体制の言葉が並び、その前の数年間ではわずかながらもみられた錦織の民法改正に関する議題の記録は、ついにみられなくなる。

78 『婦人』第13巻11号、24-25頁

79 同上、36頁

80 錦織久良子「女性問題同情者」（『婦人』第13巻2号、1936年2月、12頁）

81 『大阪朝日新聞』1937年10月26日夕刊、2頁

82 同上

1938年の第19回全関西大会も続いて「非常時連合大会」⁸³と呼ばれ、この大会でも、錦織の司会によって、大会の冒頭に「皇居、伊勢神宮を遙拝、皇軍将士への黙祷、国歌斉唱」⁸⁴が行われる。「集団訓練」や「銃後の家庭生活刷新」⁸⁵などについて「熱心な協議」が行われ、「生駒山道場における心身鍛錬や橿原神宮における勤労奉仕」⁸⁶がプログラムとして実施される。

1939年の第20回全関西大会⁸⁷も、前大会に引き続き非常時連合大会である。それまでの大会同様、錦織の司会によって、「宮城遙拝、皇軍将士と英霊に黙祷、国歌斉唱」⁸⁸が会の冒頭に執り行われる。3年ぶりに記録される錦織の発言の内容は、「優生学を基礎とした結婚」⁸⁹である。また、大会全体の議題は「新東亜建設のためにわれ—婦人はいかに協力奮励すべきか」⁹⁰であり、議事は1日目のみで、2日目と3日目は生駒山道場での心身鍛錬となっている。

1940年には、「国家総力戦に若き女性の参加促進懇談会」が開催され、錦織も参加している。「有閑令嬢は銃後の恥です」として、「みんな職場へ出て働きませう」⁹¹と呼ばけられる。

1940年の第21回全関西大会⁹²も非常時大会であり、錦織の司会によって、大会の冒頭に「橿原神宮に参拝」「清浄森厳の気漲る神域に“婦人報国”を祈念」「遙拝、黙祷、国家斉唱」が執り行われ、議事では、「大東亜新秩序建設に協力奮励すべき方面と方法について」⁹³が扱われている。

1941年の第22回全関西非常時大会⁹⁴は、記録に残る最後の大会となる。錦織の司会により、「厳粛な国民儀礼、国歌斉唱」が執り行われ、「高度国防国家体制婦人

83 『大阪朝日新聞』1938年11月3日朝刊、11頁

84 『大阪朝日新聞』1938年11月3日夕刊、2頁

85 同上

86 同上

87 『大阪朝日新聞』1939年11月2日朝刊、5頁；『大阪朝日新聞』1939年11月3日夕刊、2頁；『大阪朝日新聞』1939年11月4日朝刊、9頁

88 『大阪朝日新聞』1939年11月3日夕刊、2頁

89 同上

90 同上

91 『大阪朝日新聞』1940年7月2日朝刊、5頁

92 『大阪朝日新聞』1940年11月10日朝刊、7頁

93 『大阪朝日新聞』1940年11月11日夕刊、2頁

94 『大阪朝日新聞』1941年11月13日朝刊、3頁

の立場よりなすべき事柄について」⁹⁵説明がなされている。その他、「日本古来の家庭精神の再擁護の必要」として、「女は一生襁かけで働け」「婦人は果して男子よりも従◇⁹⁶であるか」「日本精神はまづ家庭の日常から」「真の日本精神は母乳を通して据ゑつけねば」⁹⁷との主張が記録されている。

以上、大会内容の概観及び全関西が主催した戦時体制下の諸大会の概観からは、年を追うごとに通常の議事が短縮され、非常時を意識したプログラム内容に移行していく様子がわかる。錦織が大会に関わり始めた1929年頃、大会は民法改正、特に家庭における妻と子供の権利を中心に民法改正に取り組んでいた。また1930年には官製のな大日本婦人会との協力を拒絶するなど、全関西独自の路線を貫く姿勢があった。しかし1931年を分岐点として、大会において民法改正は中心的に扱われているものの、日本兵の中国への出兵を正当化し、優生学的結婚の勧めをするなど、軍国主義への同調が見られる。それ以降、全関西主催の諸大会では、それまでの女性による女性のための大会であったものから、男性が指導的立場として語り、女性は家庭の領域（銃後）での従属的立場として聞く、という構図が際立つようになる。1933年以降は、それまでの民法改正に代わって塵芥問題が中心的に扱われるようになり、一層、家庭内における女性の役割が強調される。1937年以降は非常時大会との名称で、皇居・伊勢神宮遥拝、国家斉唱が大会冒頭に執り行われるようになり、銃後の婦人としての自覚をさらに鼓舞する内容となる。1939年以降は、大会の一部として生駒山道場での心身鍛錬のプログラムが取り入れられるようになり、議事はほとんど見られなくなる。以上のように、全関西の1931年を分岐点とした軍国主義傾向は、全関西の大会議事、機関誌『婦人』、また関連の諸会等からも明らかである。

塵芥清掃問題の取り組みの意図

上記において、戦時体制の中で、1931年以降の大会が特に大きく変化していった様子を確認した。戦時体制下の全関西での錦織の中心的発題の一つは、1933年ごろから登場する塵芥清掃運動である。錦織自身はどのような意図を持って、塵芥清掃運動に取り組んでいたのだろうか。

『婦人』において、錦織は塵芥清掃問題について次のように語っている。

95 『大阪朝日新聞』1941年11月13日夕刊、2頁

96 「従順」か？

97 『大阪朝日新聞』1941年11月13日朝刊、3頁

本連合婦人会も昨年二月から、塵芥清掃運動を起して「公民権は無くとも市の公民として主婦でなければ出来ない塵芥減量運動に力を尽さう」と申合せ（中略）関西の母性がそゝぐこの温かい心、永遠に諸子の血となり、やがて祖国を背負うて起つ良き国民となるべく健やかに――生立つてくれ!!⁹⁸

この塵芥運動の取り組みは、それまでの錦織が取り組んできた民法改正に比較すると、異なる点がある。第一に、取り組みの視点の先が、政治の領域から家庭領域に転換している点である。もともと民法改正の取り組みも、家庭における妻と夫の権利の平等を目指すものであったので家庭と無関係だとは言えないものの、それを民法という政治領域を通して実現しようとするものであった。しかし、塵芥問題においては、主婦が直接的に家庭内において可能な範囲で実行しようと呼びかける点で、家庭内に限定された運動であると言える。

第二に、男性と女性の関係性の捉え方が異なる。以前には、「全関西婦人連合会としては来議会ではまづ婦人公民権を是非とも闘ひとり」⁹⁹として、男性を敵として女性同士が協働する、という女性対男性の構造があった。しかし、塵芥運動においては、男女に平等な権利を求める、という対等なジェンダー関係への主張は影を潜め、男性が社会の先頭に立ち、女性は家庭での塵芥問題を通して家庭から社会を助ける、という社会の補助的な存在として女性が捉えられている。

このように、それまでの民法改正中心の取り組みに比較すると、大きな転向にも見える塵芥清掃問題であるが、1933年10月『婦人』での「婦選運動よ何処へ行く?」¹⁰⁰の執筆では、錦織自身はどのような意図を持ってこの塵芥清掃運動に取り組んでいたのかを読み取ることができる。

我々は（中略）一時方向を転換して「婦人の実力を先づ自治制の上に反映せしむる方法」を考慮して、男性支配の自治制のみが至上なものではないことを、男子に自覚せしめ、永年男子が家庭、社会、国家における婦人の地位について誤った考へを抱いてをつたことを矯正し、真の正義に本づいた社会を建設する一方法として、婦人の政治的解放を痛感せしむる必要が

98 錦織久良子「女性展望台より 塵芥半減運動、街頭募金風景、農村と共同炊事場」（『婦人』第11巻12号、1934年12月、12頁、14頁）

99 『大阪朝日新聞』1931年3月25日朝刊、5頁

100 錦織久良子「婦選運動よ何処へ行く?」（『婦人』第10巻10号、1933年10月、12-13頁）

ありはしまいか。この点については、我が全関西婦人連合会ではつとにそこに着眼して、本年四月から大阪市の塵芥清掃運動なるものを起こした（中略）。こゝに、公民権のない婦人の登場する必要を痛感した我が全関西婦人連合会は、即ち各家庭の婦人に呼びかけて、塵芥減量作戦を始めること、なつた（中略）。我々婦人は、公民権は与へられてゐないけれども、市の公民である以上、これが責任を痛感してこの運動に着手したのである。（中略）我々はかくの如くして、婦人も自治制の上に実力を反映せしむる方法が考究せられなければならないことを痛感する。（中略）婦人の実力を男子に認識せしめ、我国古来の良妻賢母の伝統と婦人の政治的解放とに矛盾する所ありと漠然に考ふる我国の識者に反省を促し、（中略）男子に対抗する被圧迫者としての婦人の政治運動と解釈されるとの誤解を解き、婦選は政治の総てにおける「最後の切札」であることを自覚せしむるならば、その効やまた甚大といはなければならない。（中略）今は迂遠であるが、（中略）地熱が地殻の一角を破つて、一大噴火山として爆発する時がある。その時こそは、我等が数十年間待望したる婦選の世であり、真の普選の時代である¹⁰¹

ここには、錦織にとって塵芥清掃問題の解決はそのものが目的ではなくあくまでも手段であり、たとえその方法が遠回りであったとしても、塵芥清掃問題への取り組みを通して男性が社会における女性の存在意義を認め、女性に市民権が必要であると確信させることを目指す旨が明記されている。錦織自身が大阪市清掃運動研究座談会で、「この实际的運動に成功して早く公民権を得たい」¹⁰²と発言していることでも明らかだろう。つまり、従来の方法では民法改正は難しい。それならば、まずは女性の塵芥清掃への取り組みによって一人前の国民としての女性の社会における存在意義を認めてもらい、ひいては市民権を獲得する、という道筋である。それまで同様に最終的には民法改正を願っているものの、その道のりがあまりに遠いがゆえに、まずは、具体的な生活改善に直結し、金銭的に可視化されやすく、さらに女性も取り組みやすい塵芥問題を手段として用いる、ということなのだろう。錦織がこの塵芥問題にかける心意気は、5箇所で講演を行った¹⁰³という精力的な取り組み

101 錦織久良子「婦選運動よ何処へ行く?」（『婦人』第10巻10号、1933年10月、12-13頁）

102 『婦人』第10巻3号、1933年3月、16頁

103 『婦人』第10巻4号、1933年4月、9頁

にも表れている。

以上、女性を家庭の領域にとどめようとした全関西の塵芥問題の取り組みの中にいながらも、錦織にとっての最終目的は塵芥問題そのものではなく、家庭における女性の権利を確保するための民法改正にあったと考えられる。

4. 錦織にとっての神礼拝と天皇礼拝

第二次世界大戦下において、多くの日本のキリスト者また教会が天皇制を正当化してきたことは、諸研究によって明らかにされている¹⁰⁴。一方で、そのような天皇制に警鐘を鳴らし、明確な反対の姿勢を示した柏木義円のようなキリスト者がいたことも事実である。しかし錦織はそのようなキリスト者ではなかった。1931年以降は特に軍国主義に順応していく全関西を錦織は活動拠点とし、1937年以降は、錦織自身は司会者として自ら大会の冒頭に宮城遥拝と国歌斉唱を執り行う。かつては「神の愛と弱者に対する慰めと罪の赦しと真の救ひと斯うした人生の光明」を見出し、「神は無意味に事をなさらないすべては神の深い御聖旨に出でたものといふ絶対信頼の念も加はつて、逆境に恩寵を感じ悲哀に感謝の出来得る美しい信仰神の愛と弱者に対する慰めと罪の赦しと真の救ひと斯うした人生の光明」¹⁰⁵の喜びや、「真の救はエスキリストにあるのだ」¹⁰⁶との確信を『婦人新報』に記し、『基督教世界』では「神なしと 君なほ言ふや こゝに来て見よ 南海の夕ばえの空」「聖手こゝに 彼処に雲よ 陽のいろよ 詩篇十九を 誦して讃ふる」¹⁰⁷として神の創造の御業と救いのキリストの誕生の喜びを歌った錦織¹⁰⁸にとって、なぜ神への礼拝と天皇への礼拝が両立し得たのだろうか？

この頃の錦織の信仰観の一端を示す執筆が『婦人』にある。

子供の宗教々育などは、ひもじい時に飯を食べさせたやうに効果がてき面

104 例えば、次の文献を参照。塚田理『象徴天皇とキリスト教』新教出版社、1990年；松谷好明『キリスト者への問い』一麦出版社、2018年；「教会と政治」フォーラム編『キリスト者から見る〈天皇代替わり〉』いのちのことは社、2019年

105 錦織くら子「どくろの告白」（『婦人新報』244号、1917年11月、24-25頁）

106 同上、28頁

107 北見くら子「南海の夕」（『基督教世界』1767号、1917年8月16日、8頁）

108 前掲拙論「『基督教世界』における錦織久良—宗教文芸家から銃後の婦人へ」参照。

に現はれるものではない。それが平時においては現はれずとも、一朝事にぶつかった時、以上のやうな信念は強い「力」となつて現はれてくる。(中略)では、どういふ方法を以て我々母は家庭において宗教々育をしたら良いか？(中略)子供の宗教的行事について敬虔な態度を持たすべきである。例へば祭礼とか、朝の御仏前のおつとめ、法事、盆、礼拝、神棚への燈明、葬式等の如き宗教的行事については、敬虔な態度を持たしめねばならぬ。総じて子供の宗教々育は先づ形式より入るが近道である。¹⁰⁹

キリスト教以外の一般の女性たちを読者とする『婦人』への執筆であるため、「祭礼とか、朝の御仏前のおつとめ、法事、盆、礼拝、神棚への燈明」といった諸宗教を挙げることは読者対象を考慮する上で必然であったとしても、「子供の宗教々育は先づ形式より入るが近道」と断言する視点は、かつて錦織が『婦人新報』などに綴ったやうなイエスの救いに歓喜した¹¹⁰信仰の姿勢とは重なりにくい。また、日曜学校教案誌には、イエスの復活について、「幼児には肉体の復活はすなほに信ぜられる時代であるから、大人の様に必ずしも『肉に死して霊に甦へる』との意味に取らずとも肉体の復活其物を信じて、死んでも再び墓の中から生き返つて来ると万一信じても決して差支へはない」¹¹¹とも述べている。これらから読み取れる錦織の宗教観は、宗教を道德倫理の一つとして捉え、キリスト教も道德倫理として有益であることを示そうとしているように思われる。その姿勢が、連合大会での宮城遥拝や生駒山での修養を受け入れることのできたことにも引き継がれていくのかもしれない。

錦織の活動拠点であった組合教会と全関西の両方において、明らかな天皇崇拜の傾向があった。錦織がキリスト教文芸の主な活動の舞台とした『基督教世界』は、天皇制を支持する文章が並び¹¹²、錦織自身も天皇を賛美する歌を詠っている。また錦織が婦人運動の主な活動の舞台とした全関西も、当初から天皇制との結びつきを強く持った団体であったことは先行研究で指摘されているとおりである¹¹³。1939年

109 錦織久良子「家庭に於ける子供の宗教教育(文部省の宗教教育案)」(『婦人』第12巻12号、1935年12月、6頁)

110 例へば、錦織くら子「どくろの告白」(『婦人新報』244号、1917年11月、28頁)。

111 錦織久良『国際日曜学校級別教案』1929年4月、146頁

112 前掲拙論「日本基督教婦人矯風会機関誌『婦人新報』にみる錦織久良の娼妓論」37-69頁、および『基督教世界』における錦織久良一宗教文芸家から銃後の婦人へ」参照。

113 藤目、前掲論文、112頁。他には、「全婦はその象徴的存在であつて、日本の婦選運動そのものが、天皇制「国民」国家の枠組みから決してはみだすことはなかつた(中略)「愛国」や「国

以降、全関西の大会の一部として行われた生駒山道場での心身鍛錬の集いには、司会者であった錦織も参加したことだろう。この二つの団体に身を置き、それを生活の中心としていた錦織には、それがあまりにも当然のことで、天皇を崇拝することとキリスト教の神礼拝との間に違和感や矛盾は感じられなかったのかもしれない。

以上の錦織と全関西の関係から、次のことが言える。錦織は、共立女子神学校在学時代の20代の頃から矯風会機関誌『婦人新報』に廃娼問題をテーマとした小説「髑髏の告白」を連載するなど、家庭内における妻と夫の権利の平等に関心を持っていた。30代は結婚、育児、夫のアメリカ留学の期間は愛染園での住み込み、リウマチの闘病など、私生活においても多忙であり、またキリスト教関係の執筆は『基督教世界』を中心に行われていたが、その一方では、覚醒婦人協会に入会し、全関西の大会に出席、また廃娼大会で演説するなど、婦人運動への関心は継続していた。40代になると同時に、全関西の中心的な役割を果たすようになる。錦織の全関西との関わりは、その20代からの関心の連続線上にあるものだろう。体制内的と言われる全関西であるが、錦織が積極的に活動に加わるようになった1930年頃は、全関西の主な議題は、女性の公民権獲得であり、女性たちが対男性、対官制に向けて積極的に、また大胆に発言をすることができた時代であった。1930年代初頭の数年間、錦織はこのような全関西の中で政治法律部委員長として民法改正に精力的に取り組んだ。しかし、軍国主義が色濃くなり、また目指している民法改正が遅々として進まない中で、錦織は戦略を変更し、民法改正を直接的、また性急に目指すのではなく、まずは良き国民としての女性像を男性に認識してもらうことを通して、社会における女性の権利獲得に繋げようとする作戦に変更した。それでもなお1930年代半ばまでは、錦織は執筆の上では民法改正の必要を訴え続けた。しかし、1930年代後半になり、全関西が非常時大会と呼ばれ、宮城遥拝や国歌斉唱が行われるようになる頃には、錦織が婦人運動の執筆の中心の場としていた『婦人』は終刊となり、婦人問題について発言する機会もなくなった。しかし『基督教世界』では、銃後の女性の役割や北支伝道など、時局に沿ったものや思い出の随筆などに混じって、母と子の法律についても寄稿していること、さらには矯風会大阪支部においても法律部長を務め、1937年の矯風会文書には「政治は生活なり」として、「婦人よ目醒めよ政治に」と呼びかけていることから¹¹⁴、錦織の民法改正への意欲が

権」意識が下支えとなって女性の政治的権利参与の要求がなされていった」（鈴木編、前掲書、28頁）。

114 婦人矯風会大阪支部『歩み：大阪婦人ホーム三十年史』婦人矯風会大阪支部、昭和12年、

完全に失われたのではないことが分かる。

1941年以降の戦中と戦後、そして1949年の錦織の死去に至るまで、錦織による執筆は、キリスト教文芸の分野においても、婦人運動の分野においても管見の限り残されておらず、錦織自身が自らの戦中の天皇崇拜、天皇擁護への姿勢をどのように受け止めていたのか、また1945年の女性の参政権獲得、さらには1946年の39名の女性衆議院議員の誕生をどのような思いで見つめていたのかを知る手立てはない。新たな資料の発見が待たれる。

結

本稿において、錦織の全関西での婦人運動の取り組みから、キリスト者としての錦織の目指した婦人運動の意義と限界を検討した。

婦人運動家としては、西日本最大の婦人連合会での中心的な役割を担い、女性たちに向けて政治に関心を持つように呼びかけ、当時の女性たちにとっては馴染みの薄い民法の内容をわかりやすく解説し、家庭における妻の権利獲得のために民法改正が必要であることを訴え続けたその執念ともいえる精力的な活動には意義があり、十分に評価されるべきである。錦織の『婦人』での最後の執筆は、1937年の「社会的には全関西婦人連合会の目標である 一、社会道德向上運動 一、愛市運動 一、塵芥清掃 一、母子扶法案通過 一、民法改正促進 一、家庭調停法案の実現などの達成を期したいと希つてをります」であった¹¹⁵。これこそが、錦織が当初から全関西に期待していたことだろう。

一方で、キリスト教信仰においては、錦織が司会者として指揮を執り宮城遥拝を導いたことについて、私たちは批判的な視点を持つべきであろう。錦織自身はキリスト者としての明確な自覚を持ちながらも、違和感を覚えることなく天皇を賛美し、天皇礼拝を先頭に立って執り行っていたように見える。その理由の一つは、錦織が属する組合教会も全関西も、錦織を取り巻く生活圏の全てが天皇制一色であり、それ以外の選択肢があることに、錦織は気がつくことができなかったとも考えられる。それは錦織の限界であると同時に、現代キリスト者への警鐘でもある。

53 頁

115 錦織久良子「今年から実行したい事 今年から改めたい事」(『婦人』第14巻1号、1937年1月、5頁)

『婦人』 錦織久良 執筆一覧

発行年月日	巻号数	タイトル
1931(昭和6)年1月	8-1	尻馬ははじめ
1931(昭和6)年7月	8-7	一人でも多くの女性がこの作を
1931(昭和6)年8月	8-8	男女貞操の平等につき全日本の婦人に呼びかける
1931(昭和6)年10月	8-10	婦人のために改正すべき法律
1932(昭和7)年2月	9-2	婦人に関する民法改正案に就て 穂積重遠博士を訪ふ
1932(昭和7)年3月	9-3	婦選デー!白樺の婦人隊が各会社やビルへ乗り込み 請願書に署名を求む
1932(昭和7)年7月	9-7	民法改正 私生子問題 AとBとの対話
1933(昭和8)年4月	10-4	第六十四議会に提出された婦人と子供に関する法律案
1933(昭和8)年9月	10-9	銷夏漫筆 声のみの民法改正一家事審判所の要望
1933(昭和8)年10月	10-10	婦選運動よ何処へ行く?
1933(昭和8)年12月	10-12	婦人の眼に映ずる故村山社長の面影
1934(昭和9)年2月	11-2	女と子供に関する議会持ち腐れ案再吟味
1934(昭和9)年7月	11-7	舞鶴婦人会総会—(天の橋立に遊ぶ)
1934(昭和9)年7月	11-7	女性展望台より 国防婦人会の屑物集めと屑物業者らの陳情、英国の反女性連盟
1934(昭和9)年8月	11-8	女性展望台より一親子心中と母子扶助法案
1934(昭和9)年9月	11-9	女性展望台より 離婚裁判、農村の更生と婦人の役割
1934(昭和9)年10月	11-10	女性展望台より 目睫の間に迫る廃娼令と廃娼問題
1934(昭和9)年11月	11-11	女性展望台より 風水害と婦人の活躍、私生子認知の訴訟
1934(昭和9)年12月	11-12	女性展望台より 塵芥半減運動、街頭募金風景、農村と共同炊事場
1935(昭和10)年1月	12-1	女性展望台より 母性愛と蝗、新良妻賢母主義、女のやうな男のやうな女
1935(昭和10)年2月	12-2	女性展望台より 外国に紹介される日本の婦人運動、二つの母性愛
1935(昭和10)年3月	12-3	女性展望台より「廃娼と業者の反対運動及び廃娼後の対策」
1935(昭和10)年4月	12-4	女性展望台より 第六十七議会議案を顧みて、花嫁の無い結婚
1935(昭和10)年5月	12-5	女性展望台より 女性の純潔に対する考察、国際母の日
1935(昭和10)年6月	12-6	女性展望台より 小学校児童の万引闇街頭紙芝居の取締 少年映画
1935(昭和10)年7月	12-7	女性展望台より 宮津刑務所の女囚に語る
1935(昭和10)年12月	12-12	家庭に於ける子供の宗教教育(文部省の宗教教育案)
1936(昭和11)年2月	13-2	女性問題同情者
1936(昭和11)年9月	13-9	若い女性に薦めたい書物
1937(昭和12)年1月	14-1	今年から実行したい事 今年から改めたい事